

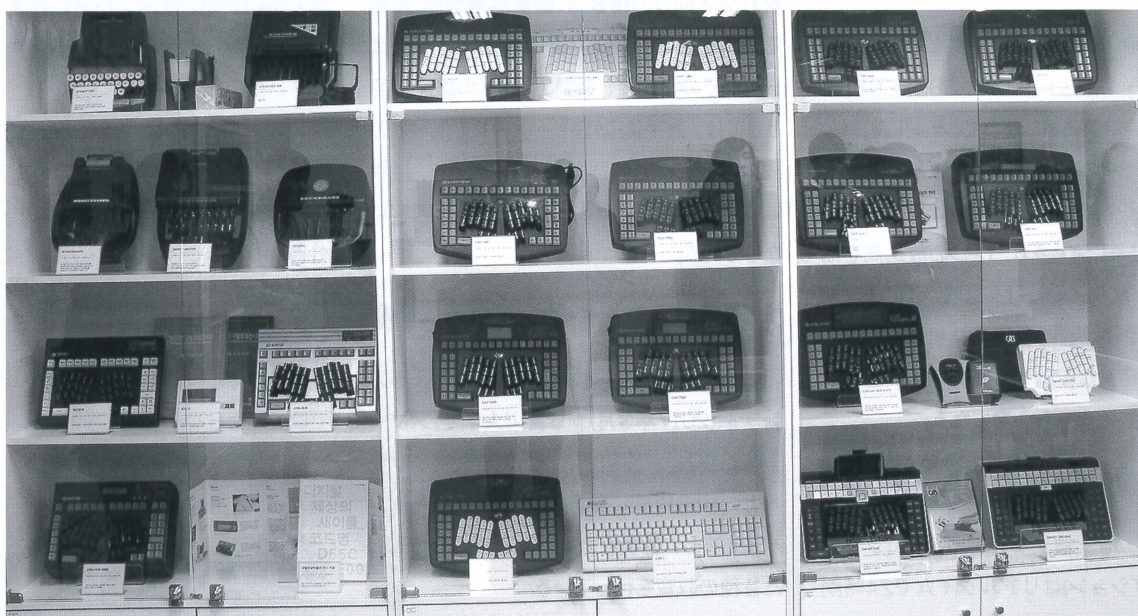
競争激化する韓国のリアルタイム字幕ビジネス

大手制作会社「韓国ステノ」等を中心に「速記歴史館」を開館

薄葉威士

Usuba Takeshi

株式会社議録研究所相談役



歴代の入力機の数々が歴史館には展示されている

日本の議事録作成分野の第一人者の薄葉威士氏が韓国スマート速記協会の招きで、「速記歴史館」開館式に立ち会う機会を得た。「速記歴史館」の概要や韓国におけるリアルタイム字幕ビジネスの競争激化の状況を報告していただいた。掲載写真はすべて薄葉氏が現地で撮影したもの。なお、月刊「ニューメディア」誌では、2013年3月号で「Korea Steno Special Report 韓国リアルタイム字幕放送の最前線・韓国最大字幕制作会社「株韓国ステノ」現場報告 各放送局と専用回線で直結／求められる98%以上の正確度」という記事を掲載した。また、この記事は国立国会図書館の「NDL-OPAC」でも検索可能だ。すでにこの記事に掲載してから約5年を経過する。リアルタイム字幕ビジネスは、当時は株韓国ステノ社の独占状態であったが、薄葉氏の報告の通り、需要増により、現在では価格競争を含めて激しい競争が展開されている。(編集部)

「速記歴史館」開館

2017年12月、韓国スマート速記協会が設立した「速記歴史館」(ソウル市)の開館式に招かれ出席した。この歴史館は、いわゆる手書き速記ではなく、主に電子速記入力機の変遷についての歴史、歴代の機器類を

展示してあるもので、速記に関係ある各分野、国会、裁判所、放送局、大学、地方自治体、青瓦台(大統領府)等の関係者が多数参列した。

電子速記とは、音声を人が聞いて、特殊なキーボードで入力し、ハングル文字に変換して出力するという、日本、米国の裁判所等で

採用されている方式の韓国版だ。

音頭をとった韓国ステノ

この韓国スマート速記協会の中心的位置を占めているのが株韓国ステノ(ソウル市)という会社で、システムを含む入力機器を製作・販売し、議事録作成に関しては国会(8

競争激化する韓国のリアルタイム字幕ビジネス

割強)、地方議会(9割近く)、裁判所等では独占的シェアを誇っている。この入力方式をCAS(コンピュータ・アシステッド・ステノグラフ)方式といい、放送字幕関係では、韓国内地上波テレビ字幕の大部分の業務を請け負っており、本社の他ソウル市内に2ヶ所の入力センター(江南、新村)を有している。

需要増で受注競争が激化

韓国の地上波テレビは、主なものとしてKBS(2チャンネル)、MBC、SBS、EBS(教育チャンネル)がある。かつて5年前に取材したときは、この韓国ステノがリアルタイム字幕市場を独占していたが、昨今は入札制度による安値競争にさらされ、「2つの放送局を他社に取られた!」と同社社長は嘆いていた。半値程度で受注に臨む新規事業者も出てきたというが、そんな安値で品質の方は問題ないのか、他人ごとながら心配になる。

社会人向けの字幕入力者教育

韓国では地上波テレビ放送字幕(クロードキャプション)はリアルタイムで24時間100%付与されているという。ハングルは表音文字で、入力機を使っての文字化は、漢

字、平仮名、カタカナ、アルファベット等への変換を必要とする日本語に比べて容易であるが、それでも人が発話する速さで正確に高速入力するにはそれなりの訓練が必要だ。2、3人一組での連携入力手法の習得や、各ジャンルにわたっての基礎知識、高度の国語能力を必要とする。

そのため、このスマート速記協会には、一般社会人向けの講習会(職業訓練講座)が用意されている。毎日午後1時か2時から午後5時までの授業で、期間3ヶ月強の講座内容としては、前半はCASキーボードを使っての入力訓練を中心に速記録の作成手法、後半は放送字幕システムに重点を置いた内容になっている。

大学に「スマート速記学科」新設

このスマート速記教育に関して2017年の新学期(2017年3月)から富川大学で「スマート速記学科」が開設された。富川大学はソウルと仁川の中間に位置する富川市にキャンパスを有し、産学協力を柱に実践に力を入れた各種の教育を行っている。

このスマート速記学科は現在は2年制(定員40名)だが、2019年度からは4年制への移

行を計画しているという。前述のスマート速記協会と連携して教育を行い、就職先としては青瓦台(大統領府)、国会、裁判所、地方議会等の速記関係公務員、テレビ放送局関係等が予定されている。

実務教育に重点を置いているだけあって、民間会社から派遣されている者も多く、55歳の学生もいるとのことである。実際に見て歩いたが、キャンパスには実習施設も整っており、教育環境としては十分のように感じられた。

このような大学教育は、諸外国ではベルギー、ドイツ、ハンガリー、チェコ、中国等で行われているようだが、残念ながら日本は大分遅れをとっている。というより、このような教育機関は、1年制の講座開設を予定している専門学校が1校あるほか、一部字幕業者が自社のために行っているものを除いては日本では見当たらない。当該学科長から、日韓中での連携協力を強く求められたが、日本での受け皿が問題だ。

音声自動認識などの導入進む

議事録作成に関しての音声自動認識については、韓国に比べて日本は一日の長がある。前述のように、議会の議事録作成、テレビ字幕関係については、ハングルは日本語文字に比べて処理がしやすいこともあり、音声自動認識の必要性の切迫感は余り感じられなかった。ただ“いずれ通る道、通らなければならない道”という認識はあるようで、速記歴史館開館式のセレモニーでも、音声自動認識でのリアルタイム字幕(ハングル表示)及び日本語への同時翻訳の実演も披露された。今後、音声自動認識システムや外国語同時翻訳への挑戦が急速に進むだろう。

日本のリアルタイム字幕の活用

字幕は、本来は聴覚障害者のため、あるいは難聴者のために始まったものだが、現在で



薄葉威士(うすばたけし)

1944年生まれ
1965年、衆議院速記者養成所研修科修了後、衆議院事務局に入局。速記監督を経て、会議録データ管理室で会議録作成システムを構築。庶務部企画調整室長として国会(衆議院)テレビ中継システムの構築に当たる。その後、記録部各課長を経て副部長で退職。直ちに韓国に渡り、韓国外国語大学、釜山大学の語学研修所で学ぶ。現在は(株)会議録研究所相談役。

は、公共施設内、空港ロビー等の音声を出せない場所でのニュース、広報、娯楽情報等に活用されるようになった。また、落語、歌舞伎等の各種興行でも字幕付与が多くなっており、国際会議、シンポジウム等での字幕付与は常識になりつつある。

日本の放送関係の字幕については、

- ① ネット配信動画等への字幕
- ② 完プロ(完パケ)での字幕
- ③ 生(リアルタイム)字幕

と概ね3つに分けられるが、①については急速に進んでいる。総務省の指導もあり、聴覚障害者向けに配信業者がその必要性を大いに認識してきたようだ。

②については、NHK、民放各社が各々独自に行っているが、規格、品質もそれぞれ異なり統一が望まれている。しかし、それぞれ各社の持つ特性、利害等も絡まるせいか統一実現の道は見えていない。

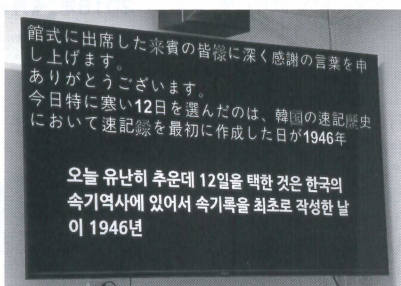
③は、テレビ業界は本腰を入れて取り組んでいるが、直近では韓国の平昌^{ピョンチャン}オリンピック・パラリンピック、少し先では東京オリンピック・パラリンピック等を見据え、需要増大は間違いないだろう。それに4K・8K時代を迎えて、字幕の規格対応も喫緊の要務になっている。

頑張っている(株)会議録研究所

私が現在関与している(株)会議録研究所は、この字幕事業への進出を図っており、ネット配信動画への足がかりはできつつある。しかし、完プロ(完パケ)には新たな教育訓練が必要で、その早急な対応に迫られている。自社の教育施設の準備の目的はついており、また幸いにもご協力いただける協力会社とも話が進みつつあるので、テレビ放送での生(リアルタイム)字幕まで見据えた事業展開も夢ではなくなってきた。



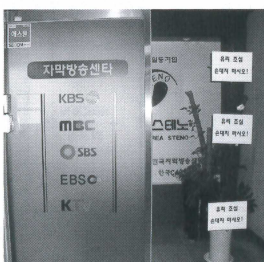
「速記歴史館」が関係者を集めて開館した。薄葉氏もテープカットの式典に参加した(左から5人目)



開館式では「開館挨拶」が日本語の同時翻訳字幕やハンブルで表示された。「1946年12月12日は韓国の議会速記録が初めて作成され日」だそうです



スマート速記学科の教科書類



最近まで韓国ステノ社の独占状態は続いたが、需要増で競争が激化した(韓国ステノ社のオペレーティングルーム入口。入退室は厳しく管理されている)

24時間体制(3交代制)でリアルタイム字幕が制作されている

